

『中国文学（月報）』と中国語：竹内好らの活動を軸として

秋吉， 收

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門：助教授：中国近代文学，日中比較文学

<https://doi.org/10.15017/9580>

出版情報：中国文学論集. 35, pp. 58-72, 2006-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『中国文学（月報）』と中国語

——竹内好らの活動を軸として——

秋 吉 收

一、近代日本と「支那語」

吉川幸次郎は、一九三七年に始まった日中戦争が長期化し泥沼化していく最中の一九四〇年に、「支那語の不幸」と題する次のような文章を書いている。

現代のわが国で、もっとも正当に認識されていない外国文化は支那文化であり、もっとも不幸な状態に放置されている外国語は支那語学である。

（中略）

支那語は「同文」であるが為に、国語と同じ言葉、とまではゆかなくとも、大して変りのない言葉のように、考えられ勝ちである。つまり外国語としては意識されにくいのであり、たとい外国語として意識されたとしても、あまり学習に努力を要せぬ外国語だと考えられ勝ちである。われわれは漢字を知っているのだから、同じ漢字で書いた支那の文章ぐらい、わけなく読めるというのである。

（中略）

しかしこれは錯覚である。われわれの国語と支那語とは、全くちがった言語である。語序がちがうことは、誰でも知っている。一人語序ばかりでなく、言語の構造が、根本的にちがうのである。そのちがいは、国語とヨーロッパ語との距離に、決して劣るものではない。それは、この二つの民族の文化が、全く同じものではな

いのと、一般である¹⁾。

当時、京都帝国大学支那文学科主任であつた吉川は、中国（支那）文化、中国（支那）語を正當に理解するよう一貫して主張するが、それを実現することは極めて困難な情勢であつた。欧米の文明を模倣した明治維新によって、アジアで最初に物質的な豊かさを手に入れた日本人は、欧米文化にばかり傾倒し、中国を始めとする同じアジアの国々の文化、言語に対しては冷眼を与え続けたのである。

日本における漢語研究の草分け、広部精の『増訂亜細亞言語集支那官話之部』（一九〇二年初版）「緒言」には、次のような言葉が見えている。

漢籍ノ如キ八層屋ニモ断ハラレ支那語ナドニ從事スル者ハ愚ニアラザレバ狂否ラザレバ固陋ノ蛮夫ト云ハル²⁾。

また、袁世凱の顧問を務めた日本軍高級將校、坂西利八郎は、「陸軍と支那語」と題する回想記の中で、次のように述べている。

…李鴻章が死んだので袁世凱が直隸總督通商大臣になつた。そして立花小一郎大将（当時中佐）が三十四年の時、私は支那語を一寸も知らない。頭から支那語を馬鹿にしてゐた。ヨーロッパへ行かねば人間でないやうに思はれてゐた時代であつた。

だが、こうした状況に一つの転機が訪れる。日清戦争に始まる日本の中国進出に伴つて、中国語の必要性が急速にクローズアップされるのである。当時の東京帝国大学文科大学教授井上哲次郎は、「語学の必要」と題し、ロシアと中国の言語の必要性について次のように書いている。

日本人の余程注意しなければならぬのは、今日の支那語と露西亞語であります。此支那と露西亞といふ国は日本と隣合つて居る国である、…（中略）…今の支那の文学は昔より遙に劣つて居る、それだから露西亞支那の言葉は文学上から必要と云ふより寧ろ國際上から必要である、この国は隣である、それから何か事の起つた時にもその国の言葉に通じて居る人が非常に多くなければ何時でも敗を取る恐れがある、…然う云う工合

であるからして此日本は隣国の言葉をよく研究しなければならぬ⁽⁵⁾、

「今の支那の文学は昔より遙に劣つて居る」との言葉は意味深長である。日本人は古来、論語や莊子、それに杜甫や李白などの中国古典には並々ならぬ愛着を持つてきた。だが当時の現実の中国（支那）におけるそうした価値は一切滅却することをまずは宣言している。つまり、現実の中国を蔑み、否定することによって、まさに開かれんとする中国侵略への道を肯定する思想へと通じていくのである。

六角恒広氏は、その著『近代日本の中国語教育』（一九六一）の中で、当時の状況を次のように説明している。

昭和の年代になると、中国語教育は、それまでにない盛況を呈した。日本の中国侵略が本格的段階になるともなつて、中国語学習者も激増し、中国語教育は盛んになった。私立大学にも多く中国語の科目が設けられ、中等学校にも進出し、各地に講習会が開かれ、「支那語」教育の「黄金時代」がきた。しかしながら、中国語それ自身は、語学としての正当な地位づけを得てはいなかった。

（中略）

明治以来の庶民の生きがいは、努力次第で立身出世が得られるところにあつた。それは、封建社会の身分制からの解放である。しかし、上からあたえられた日本の身分制の解放には、庶民としての限界がある。こうした限界への不満は、国内での夢を捨て去つて、中国大陸へのあこがれをいだかせる。そのためには、中国語の学習が最も手近なコースとして庶民に受けとめられた。

学問の対象としてなくあくまでも実用のため、時代の要求に応える形で中国語はともかくも注目されることとなった。当時、多くの日本人が中国大陸へ関心を向けたことに伴い、中国語学習書のほか、中国関係ハウツウもの、そして夥しい数の中国解説書の翻訳が出版された。だが、その品質はといえば極めて劣悪なものが多かった。

時代の風潮に抗つて、真の中国研究を目指した中国文学研究会は、竹内好や武田泰淳らを中心メンバーとして一九三四年東京に設立されるが、その機関誌『中国文学（月報）』の誌面には、こうした時代への憤りが溢れている。竹内好は、「支那語の教科書について」と題して、次のように書きつけている。

こゝに支那語の会話教科書が一冊ある。この本は昭和八年三月出版され、昭和十五年三月までに五十版重ね

てゐる。なぜそんなに売れたかといふと、著者が有名な官立学校の支那語科の主任の先生だからであらう。その学校は世間からは支那語教育の総本山のやうに思はれ、従つて、その先生は日本の支那語教育の総帥のやうに目されてゐるのである。(中略)ところが、この会話教科書は、いつたいどうやつたら一番デタラメな本が作れるかといふ実験の見本のやうにひどい編纂である。常識人なら、これだけデタラメにするには相当の苦心が⁽⁸⁾いる。

次に、中国語教育に関して、一九四〇年十二月『中国文学』第六六号に掲載された同じく竹内好による「支那言語概説」より引用する。

王力の「中国語文概論」(国学小叢書、民国二十八年四月、商務印書館)を佐藤三郎氏が全訳したものである。原著はさきに邦訳(文求堂)の出した「中国文法學初探」と共に大いに敬服して読んだ。……この翻訳は、ずる分間違ひが多い。間違ひといふより、間違ひの範圍を逸脱してしまつた出鱈目である。訳者は、支那及び支那語に関して恐しく無智である。……だが、この程度の誤訳(あるひは出鱈目)は、いまの日本の翻訳界で、決して例外的なわけではない。…僕は、翻訳の問題を、單なる語學の問題でなくもつと広範な問題に考へてゐる。

「單なる語學の問題でなくもつと広範な問題」、筆者の表現は、時局を反映して遠回しなものにならざるを得なかつたが、当時の日本全体の中国に対する大きな「間違ひ」は、より混乱、深刻の度合いを深めていくのであつた。

二、逆境の下での模索

一九四一年四月発行の『中国文学』第七一号の「後記」に、竹内好が次のように書き付けている。

支那語教育の問題は刻下の重要な問題である。この問題は一部の職業教育者にまかせておける問題ではない。日本の支那語教育の貧しさは、われわれが身に沁みて感ずるところである。われわれが学校で習つた支那語は、痛ましい限りのものであつた。

(中略)

日本における支那語教育の問題と、支那における日本語教育の問題とは、この一年の主要な編集目標の一つにして、くり返し続けるつもりである。

日中戦争のさなか、敵国たる現代中国のことを正面から論じようとすることは危険な行為であった。当時の日本において、中国はすべて「支那」と呼ばれたが、それを「中国」(中心の国、つまり中華思想と繋がると考えられた)と呼び、竹内を中心に設立された研究会に「中国文学研究会」と命名したこと自体、極めて勇気を要する決定であった。戦後、竹内本人が当時の状況をこう回想している。

たぶん中国という名を雑誌の名にしたのは、日本では「中国文学月報」がはじめてでしよう。あの頃はみんな支那です。「支那」(東亜同文会調査編纂部発行)っていう大きな雑誌がありましたし、「満蒙」(中日文化協会発行)なんてのもあった。そのほかに「支那ナントカ」というのがたくさんあったけど、「支那」は古くさいし、中国人が支那という言葉を非常に嫌うことは、文学を通して、こっちはわかっていたので、わざと「支那」を避けて「中国」という名をつけたんです。

竹内らしい軽妙な語り口の中に、強い自負が感じられる。戦争の相手国とはいえ、いやそれだからこそいつそ中国を研究し、その真の姿を伝えていくことに情熱を燃やした中国文学研究会のメンバーは、雑誌『中国文学』を根城として積極的な活動を展開していく。

中国語教育の上で、彼らがまず取り組んだのは中国語研究、講習会の開催であった。一九三五年九月の第七号「会報」には、次のような宣言が掲載されている。

言語研究部会の成立

いよいよ言語研究部をやることにした。先づ手始めにカールグレンの中国語研究の支那訳をテキストとした講読会(月一回位)を十月から実行する。今後のプラン左の如し。

(一) 支那語の発音練習

(二) 文字の問題(注音符號、国語ローマ字、ラテン化等)

(三) 言語発達史

(四) 各地方言の検討

一般会員の意見を求め、それによつて仕事を決定したい。この問題に関心を有つ方は誰でも積極的に参加を申し込んで欲しい。(武田、曹)

この後、ほぼ毎号にわたつて「言語研究部会」の活動報告が掲載される。カールグレンの講読会に始まり、胡適の友人でもある著名な言語学者、趙元仁によつて作られた発音レコードを使った発音講習会、最初期の系統的語学研究『馬氏文通』講読や、また現代文学から蕭軍の『第三代』や『周作人散文抄』の講読会など、活発な活動を繰り広げている。

こうした実践語学の講習と平行して、理論面でも活発な動きが展開される。『中国文学』に毎号のように語学関係論文が掲載され、また一九三七年三月発行の第二四号と一九四二年発行第八三号では、語学特集号が組まれている。参考まで、以下に掲載論文を挙げる。

- 『中国文学月報』第二四号「言語問題特輯号」(一九三七・三・一)
- ・ 魚返義雄 「支那言語学の任務と方法」
 - ・ 下瀬謙太郎 「国語羅馬字を語る」
 - ・ 斎藤秀一 「ラテン化運動について」
 - ・ 「中国言語学界瞥見」(言語部)
 - 『中国文学』第八三号「特輯「日本と支那語」」(一九四二・五・一)
 - ・ 「支那語界・回顧と展望」(魚返義雄)
 - ・ 中田敬義 「明治初期の支那語」
 - ・ 宮島大八 「詠帰舎閑話」
 - ・ 坂西利八郎 「陸軍と支那語」
 - ・ 岩村成允 「外交と支那語」
 - ・ 田中慶太郎 「出版と支那語」
 - ・ 曹欽源 「台湾と支那語」
 - ・ 鈴木擇郎 「日清貿易研究所と東亜同文書院」
 - ・ 青柳篤恒 「思い出づる支那語研究の懐古」
 - ・ 秩父固太郎 「支那語一夕話」
 - ・ 竹内好 「伊澤修二のこと」
 - ・ 「日本支那語関係年表」

中国語のようないい加減な言語に文法などは存在しないというのが一般認識であった当時において、学術研究としての中国語研究を貫いた彼らの熱い思いが伝わってくる。だが、現実はやはりかなり厳しいものであったよう

で、たとえば中国語講習会も活況とは言い難い状況であった。一九三七年五月号の「後記」には、次のような言葉が見えている。

第十三回支那語講習会が四月二十三日から始ります。毎春秋二回、三ヶ月の会期です。一番合理的な会だが、それでも定員に充ちたことがない。せいぜい御利用あらんこと敢て宣伝致します。

日本の中国侵略が進行して、現代中国を学術研究の対象とすること自体が忌避される。真実を知ることが容易ではなくなり、自由な言論が統制されていく。そんな暗黒の時代の中でも、孜孜として自分たちの信ずる道を貫いた竹内好は、控え目に、しかし高らかにこう宣言していた。『中国文学』第二〇号（一九三六・十一・一）の「後記」から。

…発音の講座を始めるから、希望の方は多数参加を願いたい。その他の研究会も地道に続けられてゐる。それが決して小さすぎる仕事ではないと自負する

三、守旧派との闘い

青木正児は、一九二一年一月『支那学』第一巻第五号に掲載した「本邦支那学革新の第一歩」と題する論文の冒頭、次のように書いている。

二百余年前、正徳の昔に於て荻生徂徠は夙に道破した。漢学の教授法は先づ支那語から取りかからねばならぬ。教ふるに俗語を以てし、誦するに支那音を以てし、訳するに日本の俗語を以てし、決して和訓廻環の読方をしてはならぬ。……爾來二百年、未だ其の実現を見ないのは何といふ奇怪だらう。

二百年余り前、つまり鎖国時代の日本で、実際の外国人と接し、ナマの外国語に触れ、学ぶ機会などほとんど望み得なかつた状況にあつて、漢字の中国語音がわからなくても日本語で読み進めることができるという、「和訓廻環の讀方」つまり「訓読」は、極めて「便利」な方法であつた。だが、元来外国語である中国語を日本語として読もうとするのであるから、当然、そこには矛盾が発生する。青木正児は、「訓読」の弊害について三点を挙げる。

- (一) 訓読は読方に手間取つて支那人同様に早く読むことが出来ない。
- (二) 訓読は支那固有の文法を了解するに害がある。
- (三) 訓読は意義の了解を不正確にする。

また、京都、東京両帝大の中国文学科教授を務めた倉石武四郎は、その著書『中国語五十年』（一九七三）の中で、当時を回想して次のように述べている。

…当時、わたくしがひとつ考えたことがあります。それは当時の支那文学というものですが、学校では『論語』を読めば『子曰く』学びて時に之を習つ、亦説はしからずや』といわなければならなかつた。それが当時一般の教授法であり、学習法でありました。しかし考えてみますと、中国の人はそんなことを言つて漢文の本を読むはずがない。もちろん中国音で読んでいるに違いない。これはどうも奇妙なことだ。

(中略)

…英語やドイツ語の教科書はいびんむずかしいものをやらされた。それでもへたくそながら西洋人のよむ通りには読んだはずで、そしてそれで意味はわかつていました。ところが漢文だけは、あるいは支那文学だけは、不思議なことをやっているものだと思えた。原文をみながら、その漢字をひっくり返していちいち日本語にして読んだ。第一、とてもまだるつこくしてしようがないということを感じようになりました。……これがわたくしの一つの転機でした。いや、これで一生を誤つたのかもしれないが、とにかくそういうことを考えてしまつた。どうしようもないことです。それから以後、何とかしてこの壁を突き破りたい、さもなければ本に支那文学はやれないということをつくづく考えたものです。

倉石武四郎は、中国語音による漢文読解を強く推進した大御所として有名である。周知のごとく、中国語辞書の編纂や、中国語教育の実践者として大きな足跡を残している。

次に引く吉川幸次郎は、京都漢学の正統な継承者として古典文学研究において多大な功績を残しているが、その彼も次のように述べていたことは注目されよう。「支那語の任務」（一九四一）から引用する。

いわゆる「支那語」といわゆる「漢文」とが、同じ民族の言語であることは、殆んどわが国人には、忘れら

れているように見える。そうして昔の支那と今の支那とを、別別に研究すべしという認識も、実はそこから生まれている。しかしこの二つは、一つは支那の口語であり、一つは文語であるに過ぎぬ。当然一貫した方法で学習されるべきであり、また学習し得るものなのである。¹²⁾

中国語理解という点だけから見ても、これらの意見は現代の私たちにとつても至極もつともなものだが、当時そこには複雑な事情があつた。「訓読」は、単に文章をどのように読むかの問題ではなく、近代日本の中国に対する思想的意味合いをも含んでいたのである。まず、「訓読」の存在した背景について、倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』(一九四一)から引用しよう。

徳川時代に訓読が盛んに行はれたのは、鎖国時代としての已むを得ない事情によつたもので、たとへば荻生徂徠の一派のやうに、支那の現代音で直読するといふ方法論が成功しなかつたのは、時代の背景なり組織なりに適合しなかつたからである。それ故、徳川時代の訓読教育は、ただ日本人の教養といふ点に重点をおき、支那の学問を研究するといふ方向には向かなかつたことも当然であり、ただ教養とさへ云へば好いたために、支那のことを理解しなくとも差支へなく、自然、近代のことは一向顧みられず、二千年三千年前の書物を読むだけの仕事であつた。そして、支那の古代を崇拜するといふ思想が植ゑつけられた。¹³⁾

安藤彦太郎も「中国認識の二重構造 現実への軽侮と古典への尊崇」(一九八八)と題して次のように述懐している。

…時間の軸で二分された中国認識を、端的に具現しているのは、日本で漢和辞典と中国語辞典がまつたく無関係に存在しているという事実であろう。……日本人にとつて『論語』や『唐詩』は自国の古典とおなじなのに、康有為や五四運動など近代の人物や事件はほとんど知らず、古典は漢文読みする一方で、中国語は『特殊語学』あつかひだつた。¹⁴⁾

「特殊語学」、もちろんこれはプラス方向の言い方ではない。英語やドイツ語など西欧言語に対して、その価値を数段低く見られた差別語との謂いである。戦時下の日本で、中国は、「民族的、文化的に劣つた」「危険な共産主義思想の跋扈する」国であると、当局によつて盛んに宣伝され、實際を知り得ない庶民はその言葉を鵠呑みにした。

「遅れたアジア諸国を欧米列強の侵略から守る」「聖戦」たる「大東亜戦争」の理念に則れば、帝国日本にとつて、そうした世論操作は必須であつた。そして、そのような劣つた民族の言語は、当然劣つた文化であり、学問の対象として見なすことなどはあり得なかつた。「実用言語」或いは「戦争言語」として、「支那語」は軽侮されたのである。日本の文化にも溶け込んだ麗しき中国古典、そしてそれを下品な「支那語」でなく、これまた日本文化たる崇高な「訓読」で読むことこそが価値ある行為、「こつした図式」が、戦争という狂気の中でより強固なものとなつていつた。その辺の状況を、当時の知識人たちの言説から跡付けてみたい。一九四一年六月『中国文学』第七三号掲載、竹内照夫「漢文・支那語教育と支那学との現実」より引用する。

一般世人がたとへ新しい中国に向つて好奇心や興味を抱くことがあつても、相手から掴み出してくる物は極めて浅薄皮相の一片二片に過ぎず、広東のいかもの料理とか、「姑娘がどうしたかうした」式の支那調歌謡とか、或は上海新聞の広告のよみかたとか、そんな程度のものしか問題にされないのである。……気味悪い共産軍や、泥臭い苦力の話しかかりが、現今の支那に就て多く語られる間は、中国への優越感は取りざりがたく、勃然たる興趣をば支那研究に湧出し得ない。

これが、当時の日本における中国認識の実際であつた。そうした逆風の中でも、竹内好らの中国文学研究会は、細々としかし力強く抵抗の筆を執り続けた。竹内と共に研究会を支えた松枝茂夫は一九三九年四月『中国文学月報』第四六号に次のような感慨を記している。

日本古来の漢文訓読法は翻訳の一種として最も下手糞の翻訳である。最も悪いことはそれが唯一無二の翻訳 いなそれが漢文そのものと考えてあるらしいことである。ああいふ下手な翻訳をやつて漢文を「読んだ」と思ひこんである漢学者の心臓は相当なものだと云はねばならぬ。

(中略)

隣邦人は幾百年来この八股文を練習した結果、牢として抜くべからざる奴隸根性と模倣根性とを造りあげ、もはや自分自身の思想も無ければ言語もなく、おかみの命令が下らなければ何の行動もなし得ないといふのが一般の現象となつた。これは周先生の説であるが、同様のことが我國の漢文訓読についても云へると思つので

ある。何にせよ機械的に画一的に訓読してさへをれば、ほんとうの意味はわからうとわかるまいと、飯櫃を失ふ心配はないのだ。⁽¹⁶⁾

松枝氏の文章はアイロニカルな言葉で締め括られているが、当時、竹内や、松枝、武田泰淳ら中国文学研究会のメンバーは、経済不況の下、東大の支那文学科を卒業した（武田は中退）ものの職もなく、赤字続きの雑誌『中国文学（月報）』を維持することすら厳しい状態であった。

中国文学研究会が、中国語研究、講習会の開催や、雑誌『中国文学』における「支那語研究特集号」の編集などを積極的に行ったことは、見てきた通りである。漢文訓読に対しても、帝大外国人教師を務めたイギリス人で日本語学研究の権威、チャンブレンの漢文訓読反対論「支那語読方ノ改良ヲ望ム」を全文掲載するなど論陣を張った。

また、中国現代文学講読会を開催すると同時に、魯迅、冰心、沈從文などの現代文学作家の個別の作品や、黄遵憲『日本雜事詩』や劉復『賣金花口述』等の翻訳掲載、加えて出版元の生活社より『中国文学叢書』を刊行して、近代の中国文学、中国事情の紹介に努めた。

ただ、一つ確認しておかねばならないのは、中国文学研究会の編集方針が守旧派攻撃一辺倒だったわけでは決してなく、たとえば、漢文訓読賛成派の有効な論文も掲載しているし、文学紹介にしても古典文学にも多くの誌面を割いていることである。一九四一年四月『中国文学』第七一号掲載、長瀬誠「支那語教学に関する随想」には、次のようにある。

支那語は外国語である。支那語を学ぶということは、現在、満州国や中華民国に於て行はれてゐる国語を吾々が学ぶのだから、勿論外国語を学ぶことなのである。

(中略)

由来支那語位文語と口語とが截然区別せられてゐる語学は少ないことゝ思ふ。喋る言葉と書く言葉とは全然別個のものであつた。よく支那語教師が、支那時文を支那語で音読する口実として、支那音でよんで直ぐ判る様にせねばならぬと云ふ。文章を音読しただけで直ぐ判る位なら、古典の半言隻句に何を苦しんで数千字の注釈をする必要があらう。……某帝大で、漢文を棒読みに支那音で音読したものゝ矢張り意味が判らぬので、音

読してその上訓読したと聞いたが、音読したとて意味が判る道理がないのである。自分は音読が悪いといふのは決してない。それが正しい行き方だと思つてゐる。唯音読すれば意味が判るだらうと早合点してゐる人々の蒙を啓きたいのである。

雑誌『中国文学月報』を逐一繙けば、中国侵略戦争というまさに極限状況下でありながらも、彼らがいかに中国に対して真剣な眼差しを注ぎ続けていたかが、ひしひしと伝わってくる。そしてその地道な営みこそが、日本の中国に対する「間違ひ」への精一杯の抵抗であつた。

だが、時代が暗黒の度合いを深めていくにつれて、竹内らの抵抗の羽も徐々にむしり取られていく。検閲も厳しさを増し、当局から完全に監視される中で、現代中国を研究すること、時局に批判的な目を向ける自由な筆を執ることが許される状況ではなかつたのである。『中国文学』誌面にも、時流に迎合した言説が少しずつ現れ、『日本書紀』の研究等の誌面にそぐわない論文が掲載されるなど、戦時色が垣間見られるようになる。

日中戦争開戦の前年、一九三六年の『中国文学月報』第十八号に、「輸入出版物の発売禁制状況」が掲載されているが、当局の監視の下で中国の出版物が禁止され、また差し押さえ処分を受ける状況が垣間見られる。同号の竹内の「後記」にはこんな言葉が見えていた。

ちかごろ、如何なる事情があらうとこの冊子をつぶしてならぬことを痛切に感じてゐる。今は在るものを死守すべき時である。いつかは頼るべき後生があらはれるだらう。つぶしてならぬだけの仕事をして来たか否かは勿論別の問題である。

日中戦争、そして「大東亜」戦争へと突入していく中で、研究会同人は次々に徴兵されて戦地、中国へと旅立ち、そこで現実の中国と新たに向き合うことになる。その後も戦局の進行に伴う物資の不足によつて紙の支給量が極端に減らされたこと、研究会運営経費の逼迫状況などにより困窮の度合いは増していく。

一九四二年、ある事件が起こる。その年十一月に発行された『中国文学』第八九号掲載、「大東亜文學者大會について」の中で竹内は次のように書いている。

先日、日本文學報國會から、會長の名で、大東亞文學者大會を開催するについて援助を請ふ旨の印刷した書

状が中国文学研究会あてに届いた。……多忙の故をもつて辭退した。……懇ろな情理を盡した翻意の勸奨があった。僕は情において忍び難かつたが、やはりお断りした。

日本、中国、台湾、満州国、朝鮮それぞれの地域から文学者を糾合して「大東亜」の理念を称揚し推進する文芸政策に竹内好が与することはあり得なかつた。だが、当局の指示を拒否することは相当の覚悟を要する決断であつたことは言うまでもない。当時の竹内好の周辺については、たとえば「中国と私 雑誌『中国文学』のころ」と題して彼自身が戦後次のように語っている。

…中国文学研究会というのは、とにかくブラック・リストにはのつていゝんですよ。…警察ににらまれていゝことはわかつていました。戦争がはじまつてからは、私の家が事務所でしたから、月一回、または二月に一回程度、特高と憲兵が必ずきました。様子を探りにと言つうか、牽制に言つうか、くるんですよ。いやな気持ちですね。しかし応対は鄭重にしました。いつ挙げられるか、びくびくですよ。大体あれは寝込みを襲つてですよ。その当時は、朝寝坊で、昼頃まで寝てたんですが、朝、眼がさめて無事していると、ああ、今日は大丈夫だといふような、そういう毎日(16)だった。

竹内が「大東亜文學者大會について」の筆を執つてから四ヶ月後の一九四三年三月、雑誌『中国文学』は廃刊する。非常時下での「闘い」はここまでであつた。

注

- (1) 「支那語の不幸」 一九四〇年、『文藝春秋』九月号。『吉川幸次郎全集 第十七卷』(一九六九年、筑摩書房)、四二二頁。
- (2) 吉川幸次郎「翻訳時評(二)」『中国文学研究会編『中国文学』第七八号(一九四一年十月二十六日)等参照。
- (3) 広部精「緒言」『増訂亜細亞言語集』(一九〇二年初版、一九〇五年第四版、青山堂書房)。
- (4) 坂西利八郎「陸軍と支那語」『中国文学研究会編『中国文学』第八三号(一九四二年五月一日)。

- (5) 井上哲次郎『語学の必要』国民英学会文学会『外国語研究要論』(一八九一年九月刊)原載。六角恒広著『近代日本の中国語教育』(一九六一年、播磨書房)参照、七五頁。
- (6) 前出、六角恒広著『近代日本の中国語教育』、二二頁。
- (7) 『中国文学』(月報)『中国文学研究会機関誌』は、『中国文学月報』として一九三五年三月創刊。竹内好が二年間の北京留学から戻り、一九四〇年四月の第六〇号より、『中国文学』と誌名を変更する。月刊は継続。発売を生活社に委託する。
- (8) 竹内好『支那語の教科書について』一九四一年十月二十六日、『中国文学』第七八号。竹内の取りあげた『教科書』について、当時その教科書を実際に使用した太田辰夫氏が「わが華語の師」(『同学』一九九一年春号)で次のように回想されている。
- 私はそこで、宮越健太郎・杉武夫著『最新支那語教科書』会話篇を使つてもらうことにした。著者は二人とも東京外国語学校の教授で、この教科書は何度も版を重ねた権威あるものなのである。ところが読んでいくうちに、その先生(留学生)は続々と教科書の誤りを指摘する。私はあきれるほかなかった。それと同時に、私は、このような著書を買つてどうなるのであろうか、と考えた。
- (藤井省三著『東京外語支那語部 交流と侵略のはざま』一九九二年、朝日選書四五八)によれば、昭和十三年当時旧姓武蔵高校の学生であった太田氏は、中国人留学生に会話を習つたが、その時問題の教科書を用いたという。
- (9) 『年譜』(一九三五「昭和一〇」年)『復刻中国文学 別冊』(一九七一年、汲古書院)四二頁。立間祥介注。
- (10) 荻生徂徠『譯文筌蹄』(一七一一年「宝永二年」)「題言」に見える。原文は以下の通り。予嘗爲家生定學問之法。先爲崎陽之學。教以俗語。誦以華音。譯以此方俚語。絕不作和訓廻環之講。(始以零細者。二字三字爲句。後使讀成書者。崎陽之學既成。乃始得爲中華人。爾後稍稍讀經子史集四部書。勢如破竹。是最上乘也。)
- (11) 倉石武四郎『中国語五十年』一九七三年、岩波書店。一八頁。
- (12) 吉川幸次郎『支那語の任務』一九四二年一月、『文藝春秋』原載。『吉川幸次郎全集 第十七卷』四五五頁。
- (13) 倉石武四郎著『支那語教育の理論と實際』(一九四一年、岩波書店)、四一頁。

- (14) 安藤彦太郎著『中国語と近代日本』(一九八八年、岩波新書、五一頁)。
(15) 筆者の竹内昭夫は当時、熊本五校(現在の熊本大学)教授。この文章は、前出注13、倉石武四郎著『支那語教育の理論と実際』に対する批判として書かれたもの。

- (16) 松枝茂夫「つめぐさ漫談」文中「周先生」とは、周作人のこと。日本の統治後も北京に留まった周作人は、招聘されて日本も訪れているが、中国文学研究会は魯迅の弟でもある極めて著名な文学者にはもちろん注目しており、各メンバーが北京及び日本でたびたび接触している。なお、松枝茂夫はこの文章を書いた直後に、九大文学部中文科の専任講師として目加田誠教授のもとに赴任している。

* 参考 中国文学研究会「年譜」『復刻中国文学別冊』(一九七一年、汲古書院)、五七頁。

(一九三八「昭和一三年」)三月一日 目加田誠(支那文・昭和四年卒業) 同人に参加。

(一九三九「昭和一四年」)四月 松枝、九州帝国大学文学部講師就任。

- (17) (東大)文科大学教師ビー・エチ・チャンブレン(BH Chamberlain)「支那語讀方ノ改良ヲ望ム」一九三九年十月『中国文学』第五五号。特筆されるのは、このチャンブレンの漢文訓読徹底排斥論の文章が、ほぼ(？)秋吉には判別不能。完璧な漢文訓読体にて書かれていることである。「訓読の出来ない外国人ふぜいが」との批判は御免。

- (18) 「中国と私」雑誌『中国文学』の「ころ」一九六九年二月号『未来』原載。『竹内好全集 第十三巻』(一九八一年、筑摩書房)、二二二頁。